届けようバイブルメッセージ
～子ども説教　７つのステップ～

教会学校研究会　宮崎　誉

教会学校研究会では、テーマを選び、教会学校で、「深く・楽しく・分かりやすく」伝えるための教本作りに取組んでいます。その第一歩が、『届けようバイブルメッセージ～子ども説教　７つのステップ～」です。高校生のＣＳ教師でも読みやすいものをと取組んできました。年末までには、教育局から出版される予定です。

説教準備のプロセスを、この教本では、七つのステップにまとめました。

①み言葉とのファーストタッチ（はじめの黙想）
②聖書を学ぶ（釈義）
③福音的な理解（福音的な黙想）
骨太な信仰・教理
④聴き手に届く（聴き手黙想）
⑤み言葉が自分に語りかける（霊性の黙想）
⑥メッセージノートを作る
体感するメッセージ（視聴覚教材）
⑦語りかけ・受け止められたメッセージ

これらのステップを丁寧に取組む時に生き生きした説教が生み出されていきます。

説教にあるドラマ

説教にはドラマ性があります。説教が語られるときには、三重の意味でのドラマ性を大切にしたいと思います。

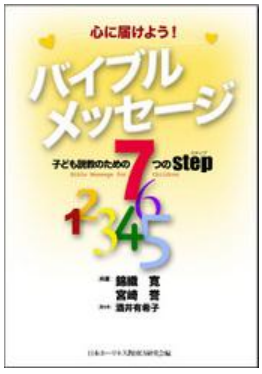
（一）聖書物語にあるドラマ。聖書に登場する人物たちが、激動の歩みの中で、生ける神様の恵みを見出し、また、イエス様に出会うことです。子ども説教では、子どもたちをグイッと、聖書物語に引き込みます。

（二）説教者と聴き手の人生ドラマ。教会に導かれる前に、また、教会生活が始まってから、様々な試練があります。そこで、何よりも大きな事件として、私たちはイエス様と出会い、十字架の愛が分かり、救われました。証しとして語られる信仰者の人生ドラマです。

（三）福音のドラマ。イエス様との出会いは、一言では表現しきれない大きな内容を持っています。教理とは、それを凝縮し、明確な筋道を持った福音ドラマの言葉です。Ｄ・セイヤーズは「ドグマ（教理）こそドラマ」という名言を残しました。使徒信条を無味乾燥と受け止めないで、豊かな福音ドラマとして受け止め直すように勧めています。永遠なる神が、人間になったなんて、驚くべきことです。その神の子が、罪を身代わりにおって死んでくださり、死を打ち破って甦られた。使徒信条が描く内容は、まさしく素晴らしいドラマです。子ども相手には、教理の表現は分かりやすく言い換える必要がありますが、工夫をして手渡したいメッセージです。

これらの三つのドラマが重なるところに、説教のドラマ性が豊かに響き出すのです。

説教・再チャレンジ

この教本は、新しい教会学校教師を育てることを目的としていますが、同時に、ベテランのＣＳ教師の再チャレンジを願っています。また、神学生、教育主事、信徒説教者にも有益な書籍となるように作りました。実際、今年の夏の勧士セミナーでも、原稿の一部を用いました。子ども説教の枠を越えて、用いていただけるのは、欧米、また日本で現在、活発に取組まれている説教研究の成果と対話して、それを分かりやすく紹介している内容だからです。

若いＣＳ教師から刺激を受けて、ベテランＣＳ教師、もしかしたら、経験の豊富な牧師先生も、新しい思いで説教に再チャレンジされるかもしれません。そして教会学校のみならず、教会全体が生き生きしてくるように期待しています。